

審査結果の要旨

論文提出者氏名 権 五暉

本論文は、「広開土王碑文」について、碑文の文章自体の内在的理解から、その本質把握への道を拓こうとしたものである。四世紀末～五世紀初頭の高句麗の王、広開土王（在位 391～412）の勲績を後世に伝えるために、その子長壽王が 414年に碑を建てた。高さ 6.34メートル、基底部の四面の幅が1.43～1.9メートルという巨大な碑に刻まれた文が「広開土王碑文」である。碑は現存するが、損傷が甚だしく、古い原石拓本に依拠した釈文によるほかない。その釈文作業自体にもなお課題をのこしているが、本論文は碑文解釈のあり方そのものを問い直し、新しい理解の方向を提起するものである。

従来の研究は、碑文の語るところを歴史的事実としてとらえ、特に、「辛卯年」（391年にあたる）条記事——「而倭以辛卯年来渡□破百残□□新羅以為臣民」——をめぐって論議を重ねてきたのであった。そこでは、四世紀段階の「倭」の朝鮮半島進出を認めるか、高句麗が「倭」を撃破したと見るか、という古代史についての大論争を呼び起こした。本論文は、そうした論議のあり方を「史実」化のパラダイムとして批判し、根本的な転換をせまる。碑文は、碑文自体の論理にそくして理解すべきだというのであり、端的に言えば、高句麗王権の正統性のためのテキストとして碑文を理解すべきだというのである。「倭」の問題にそくして言えば、碑文の記事から「倭」にかかわる歴史的事実を導き出すのではなく、碑文テキストの全体理解として、神話的記述からはじまって広開土王を正統な王統譜のなかに定位して語るという全体が「倭」をいかにあらしめているか、を問うべきだというのが、本論文の方法的立場である。

本論文は、そうした方法的立場を第一章「研究史批判と本論文の立場」で確認し、それを、第二章「正統性の論理」、第三章「広開土王碑文の世界」、第四章「東アジア世界と天下思想」を通じて具体化して展開し、「おわりに」をまとめとして置く。

第二章「正統性の論理」は、神話的記述からはじまることを王権の正統性の保障としてとらえる。「天帝之子」鄒牟王が作った「天下」は、碑麗・「百残」・新羅・東夫餘を「属民」とする世界として、そもそも成り立ったことを語るととらえるのである。第三章「広開土王碑文の世界」は、広開土王の征討の意味を、高句麗に対して「百残」・新羅等が服属するという、その「天下」の秩序を実現・保持したのものとして見るべきことを説く。

そして、その見地から、「倭」は、秩序関係の圏外にあって、この秩序に侵入してくるが撃退されておわること、また、中国は、その「天下」とともにはありえない存在としてあらわれようがないことを、明らかにする。第四章「東アジア世界と天下思想」は、高句麗の「天下」が、中国古代帝国の作り出した世界モデルとしての「天下」になって構築されたことを、他の資料（「牟頭婁墓誌」「中原高句麗碑」）とあわせてとらえ、それを日本古代国家にも共通する問題として見定める。古代東アジア世界において中国の存在は圧倒的であり、朝鮮諸国も日本も、中国王朝の冊封を受け、その世界（天下）に組み込まれていた。そのなかでみずから一つの世界であろうとすることが、独自の「天下」を作る——中国になって作るしかない——ことに向かわせた。その正統性を保障するためのテキストとして、日本では『古事記』『日本書紀』がなされたが、「広開土王碑文」は、それと同じ意味をもつテキストとして位置づけられるのである。

第二、三、四章を通じて、外に持ち出して歴史の事実に還元するのではなく、あくまでテキスト理解として問うという立場が貫かれ、碑文の内在的論理に沿って新しい碑文理解を開示したとすることができる。

本論文の評価される点は、第一に、研究史への方法的な批判が明確でかつ一貫していることである。それが、従来の研究史の見渡しとして、とくに韓国側の碑文研究についての整理とともに行われたことも特筆される。碑文については論考が文字通り山積するのであり、研究史の専著（佐伯有清『研究史 広開土王碑』吉川弘文館、1974）もあるが、韓国側の研究についてはどうしても手薄であった。いま、その欠を補い、あらためて、日韓双方において、強固なパラダイムの規制が働いていたことがあきらかにされるとともに、「辛卯年」条は倭主導説・高句麗主導説のどちらの理解が正しいかというようなことではなく、古代史の基本資料と考えられてきた、そのこと自体の問題として、明確に批判的に問い返されることとなったのである。碑文の記述、特に広開土王の征討記事を、歴史的事実に還元することを問い返す、方法的問題提起として高く評価される。

第二に、この問い返しが、従来の歴史的理解とは異なる、新しい碑文解釈を示していることである。碑麗・「百残」・新羅・東夫餘を「属民」とする、元来の世界秩序を実現・保持するという、広開土王の征討の分析は明晰である。また、「倭」を、高句麗の「天下」を構成するものではなく、その圏外にあるものとしてとらえることと、中国が碑文のなかに登場しない所以を高句麗の「天下」にとって組み入れがたいからだと見ることは、従来の歴史研究がおちいつてきた陥穽をこえた把握として評価されてよい。それは、文学研究のテキスト解釈が可能にしたものであり、文学研究からの歴史研究に対する提起ということもできる。

第三に、「広開土王碑文」という、決して大きくはないテキストをめぐって考察するのであるが、このテキストのなかに躊躇するのではなく、古代東アジア世界における、周辺国家の自己世界構築——みずからの独自の「天下」を、中国になって作り、その正統性の保障のためのテキストを作ることに向かう——という、古代日本に共通する問題にまで

掘り下げたことが注目される。『古事記』『日本書紀』のテキスト理解に関する研究の新展開がふまえられ、まさに比較の見地というのがふさわしい見渡しによって、碑文テキストが位置づけられたのである。それは、『古事記』『日本書紀』研究に対しても寄与するところとなる。

ただ、問題点として、問題意識・方法意識が先行して論がすすめられテキストの分析が十分になされていないところがあること、また、テキスト理解としての立場に徹底しないで別の新しい史実を構成しようとするような方法的不徹底が残ることが指摘された。さらに、モノとしての碑に関する把握が欠けているということも不満が残るという問題も提起され、いくつかの点に関して本論文の碑文理解についての疑問も表明された。しかし、それらは本論文の価値を基本的に損なうものではないと認められる。

したがって、本論文審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。